

Y09c 視覚しょうがい者と共に楽しむプラネタリウム ～番組副音声と点図星図の試み～

高橋真理子（山梨県立科学館）、跡部浩一（甲府市立山城小学校）、市瀬實、榊原佳美子、埜村和美（星の語り部）、小宮美砂子（日本点字技能師協会）、伊藤哲也（国立天文台）

山梨県立科学館では、プラネタリウムを場として自主的な活動に取り組む「星の語り部」（本年会発表 伊藤哲也他『『星の語り部』山梨県立科学館を拠点とする市民コミュニティー』）というグループを支援している。そのメンバーの中に視覚しょうがいを持つ方が何名か活動しており、その活動経験を生かし、スタッフが運営する通常のプラネタリウム投影でも、視覚しょうがい者も共に楽しめるような試みを始めた。その一つが、プラネタリウム番組の副音声制作である。副音声のシナリオ作成にあたり、3名の視覚しょうがい者が何度か番組を観覧し、その意見をもとに手直しを重ねた。副音声はFMトランスミッターで音を飛ばし、観覧者が手持ちの携帯FMラジオで聞けるシステムとなっている。

また、点図作成技術を持つ筆者の一人は、試行錯誤しながら毎月の星空解説用に星図の点図を作成している。これも実際に視覚しょうがい者の意見を取り入れながら改善を進めているところである。

6月に当館で行われた天文教育普及研究会関東支部会では、5名の視覚しょうがい者が参加し、副音声や点図に関して多様な意見が出され、それ以外にも、彼らが星の世界を理解したり、楽しんだりする方法論が様々にあることに他の参加者も気づかされた。本稿では、当館における試みのプロセス、それに対する当事者の声、問題点や今後の展望についてお伝えする。今後、視覚情報のない人たち、あるいは本物の星が見られない人たちにこそ、宇宙の奥深さを感じてもらえるような活動を広げていきたいと考えている。